会　　議　　録

会議名	令和７年度第１回和泉市福祉でまちづくり委員会
開催日時	令和８年１月 21 日（水曜日）午後２時から午後４時
開催場所	和泉市コミュニティセンター４階中会議室
出席者	（委員） 武庫川女子大学　心理・社会福祉学部　教授　松端　克文 龍谷大学　社会学部　講師　村田　智美 和泉市校区社会福祉協議会　代表　堀田　敏一 校区社会福祉協議会ボランティア　委員長　岡田　太一 和泉ボランティア・市民活動センター アイ・あいロビー運営委員会　運営委員長　芦田　三雄 シルバーサポートこうきた　代表　道浦　勁 子ども食堂ポピークラブ　代表　奥野　加奈女 社会福祉法人和泉福祉会　特別養護老人ホームひかりの園　園長　山抱　礼子 いずみ障がい福祉サービス事業所団体連合会　柳　望 市民公募委員　田中　朱実
議案等	第５次和泉市地域福祉基本・活動計画の進捗報告を踏まえた検討について 地域福祉推進協議会と福祉でまちづくり委員会の活性化について
会議録の作成方法	□全文記録 ■要点記録
記録内容の確認方法	■会議の議長の確認を得ている □出席した構成員全員の確認を得ている □その他（　　）

審　議　内　容　（発言者、発言内容、審議経過、結論等）	
事務局	<u>次第１　委員委嘱・紹介</u> 本委員会の委員の任期が令和７年３月末をもって満了となったことから、新たに委員委嘱を行った。 <u>次第２　委員長・副委員長の選出</u> 委員長には武庫川女子大学の松端委員、副委員長には龍谷大学講師の村田委員が推薦され、承認された。 <u>次第３　事務局からの説明</u> 傍聴の可否確認で委員から許可された。傍聴者１人が入室。 <u>次第４　議題</u> ①第５次和泉市地域福祉基本・活動計画の進捗を踏まえた検討について事務局より説明した。
松端委員長	自助、共助、公助の取組みとして皆さまが実施していることについて、報告を求める。公助は税金を財源に公的に法制度に基づいてまたは条例に基づき事業実施をするイメージである。自助はご自身か家族で助け合うもので、共助は地域での助け合いということである。
奥野委員	子ども食堂ポピークラブの奥野です。公助としては社会福祉協議会や市がお手伝いや見学に来る。先月のクリスマス会では親子 140 人程度来られたが、ボランティア

	が手伝ってくれたし、参加の子どもが行儀よく並んでくれていた。また、周りの地域住民も、交通整理をしてくれたり、車の運転手も気をつけてくれたり協力してもらった。最後には、子どもたちが公園のゴミ拾いをしてくれた。ただ、年齢が高くなってくるとポイ捨てをするようになることもある。
松端委員長	子ども食堂はどんな人が来ているのか。高齢者は来るのか。
奥野委員	子どもとそのお母さんが主。会場が坂の上のため高齢者は来られない。月１回開催で、本当に楽しみで来ているので、やめられない状況である。
松端委員長	いつから始めているのか。
奥野委員	5 年前からである。
松端委員長	継続は力なり。子ども食堂の第１号は全国的には 2012 年である。
奥野委員	一度市の許可をもらいキッチンカーも来てもらったところ、すごく喜んでくれた。
松端委員長	子どもは人を惹きつける。
奥野委員	ボランティアも年齢的に高いが、子どもが来てくれることで元気をもらい、歳を感じなくなっていく。私も元気になる。
松端委員長	子ども食堂の取り組みを話していただいた。全国的に中学校より多くなっている。和泉市も今 17 件ある。
奥野委員	今から立ち上げようという方もいる。居場所づくりとなっているが、子ども食堂という名称は、親が嫌がる人がいる。貧困を感じさせるので、子ども食堂とは言わずポピークラブという名称で活動をしている。
道浦委員	「シルバーサポートこうきた」のパンフレットを各委員に配布する。２年半前の設立当時に作ったこのパンフレットは、50～60 件配ったがその後は配っていない。理由は 50 件ぐらい配ると非常に盛況で申込みが増えそうで、団体の協力者の人数では対応しきれないと考えたためである。自分の住んでいる光明台北地区の地域住民同士が支え合う仕組みを大切にしてもらいたい。活動内容は、庭の草取りなど日常生活での高齢者の困りごとで、有償ボランティアで助けるというパンフレットである。利用時間は 30 分で 500 円、1 時間で 900 円、しかし時間で料金を決めるのは非常に問題もある。機械化に伴い道具や消耗品で値段が変わる。カセットボンベ１本 200～300 円するが、雑草の焼却を１時間するとガス代だけで 1,000 円を超える。時間よりも仕事内容で決めようとなり、最近では事前に見積もりを出している。業者と比べると３分の１から４分の１の費用で済むが、一方で元気な利用者がクーラーの効いた部屋で、外で高齢者の私たちが草取りをしているというような状況もある。外出サポートは病院や買い物で、利用者が高齢者かを確認して、本当に困っているかを確認して受付をしている。要支援１か２の人を対象に行っている。少しの手助けがあれば自分で車に乗降できる人が対象だ。一番の課題は今後も継続できるかということで、協力者不足の課題である。地域包括支援センターやケアマネジャーから申し込みが増えている。光明台北校区に限っていた。光明台南校区もよく似たことをしていたが今は行っておらず、最近は光明台南校区からも申し込みがある。実績は、令和５年９月に法人設立で、支援希望者は９人。それが半年後の令和

	６年４月には 45 件、令和６年９月は 68 件、令和７年４月は 98 件、令和７年９月は 126 件、令和７年 12 月は 142 件と非常に増えている。光明台校区は高齢者の要望や、困っている高齢者も多い。移動支援では令和７年４月に延べ 131 件、１人の人が何度も利用していることもある。これも１ヶ月ごとに増えて、月に 190 件ぐらいの申し込みがあり、それを９人の協力者で行っている。９人の中でも非常に忙しい人と、そうではない人もいる。地域住民への周知や自助・共助・公助の理解促進のための方策としては、共助が必要だと思う。地域住民の繋がりが基本ということで、この繋がりが一番大事と思っている。ところがプライバシー意識の高まりで他人に頼ることを嫌がるし、他人も人に関わることを嫌がることも増えている。共働きや高齢化によって、連携する時間がなくなっている。便利な社会システムができ、人に頼ることなく、特に食事は個別に配送してくれるなど、あまり他人と関わらなくてもいいシステムができている。そういう中で住民同士の関係が希薄になっていると感じる。その中で地域コミュニティを進めるために、私の経験から言うと、普段の生活の中で顔見知りをどんどん広げていく、地域の大きさは、小さな自治会単位ぐらいがいいと思う。住民同士が顔と名前が一致するような取組みがどんどんできれば、広がっていくと思う。具体的には挨拶するとか世間話をする、掃除を一緒にする、何らかの会合の後の食事会、共通の趣味で楽しむ、小さな役割をお互いに回す、やれる人がやるなど、同じ時間を共有するような緩やかな共存がいいのではないか。善意の強要や役員の固定、参加しない人への不満は慎んでもらいたいと思う。特に自分で気をつけていることは、多くの高齢者とたくさん接するが、自分たちは今「人を助けている」という喜びを持とうと考える。また、接している夫婦や高齢者を見て、手本としての生き方を学ぼうということも伝えている。今後も活動を続けていきたいと思っているが、協力者の維持が一番の課題だと思っている。公的には公助をして補助金を出してくれるので非常にありがたいと思っている。
芦田委員	道浦委員とは地域が一緒で、私も任意の団体としてそのような活動を 5～6 年ぐらい行っていた。社団法人になれば、市の介護保険の総合事業で費用の一部がもらえる。「ちょいサポ信太」や「なんよこ」を参考に、横へ広げていこうと考えている。今は緑ヶ丘や青葉台も同様の課題を抱えているので、支援者として参加してくれる人がやはり少ない。高齢者だけでなく若い人に応援をもらおうということで、光明台南校区はもっと自分ごととして考えてもらいたい、もう少し若い層で検討してもらうようなチラシを今度作ろうと昨日の会議に出席した。道浦委員が言われたように、最終的には 3 軒両隣のような、顔見知りでお互い助け合うという状態を作ることが、福祉の根底になると思う。各校区でも考えてもらえたらと思う。
松端委員長	校区ごとに独自性があるのが難しい。いずれにしても横に広げていくことは重要だ。校区を越えて繋がることも重要である。
芦田委員	市が本当にこの問題に直面するという認識をしっかりと持ってもらい、本委員会などでそれに対してどう対処しようかを考えていきたいと思う。市民だけで共助を一生懸命頑張っても続かないので、公助で支えてくれる共助という考え方を持って欲しいと思う。
松端委員長	共助として住民さん任せではいけない。人口減少や高齢化で子どもが少なくなる。自治会加入率もどんどん減るということなので、行政はそこをサポートすることを考えなければならない。
事務局 （社協）	<u>社会福祉協議会から地域貢献連絡会の活性化について報告</u>

松端委員長	この地域貢献連絡会ですが、神戸市に９か所、市町で 50 か所か 49 か所にできている。それを「ホットラインネット」と愛称をつけて呼んでいる。この相談事業、総合相談や子ども食堂などいろいろと行っているが、今日のお話では、それぞれの地域でどんな課題があって、社会福祉法人と連携する取り組みとしたらどんなことがあるのかということを議論してもらいたい。
山抱委員	特別養護老人ホームでは、運営推進会議という部会が３ヶ月に１度あり、その中で社会福祉法人自体が人手不足となり、光熱費・食糧費の高騰などの負担増で施設を圧迫していると課題が挙がっている。食費を勝手に上げるわけにもいかず課題としてある。私の施設は横山地区にあり、若い人は減少し、残されるのは高齢者や老老介護の方、またひとり暮らしの方となる。空き家問題や、ボランティア不足もある。地域のいきいきサロンでも担い手は不足している。施設ではいきいきネット相談支援センター相談員（ＣＳＷ）がおり、地域に関わる相談員が、地域のサロンに随時参加しお手伝いをしたり、また高齢者施設では、和泉市と福祉避難所としての協定も締結するほかオレンジカフェ（認知症の方々のカフェ）を開いたり、地域の清掃活動にも参加している。特別養護老人ホームひかりの園では月に１回、施設開放でお昼ご飯を一緒に食べたり、卓球やカラオケをしたり、子どもから高齢者まで来てもらえるような取組みもしている。特別養護老人ホームや社会福祉法人は、できる限り開かれた施設を目指している。
松端委員長	施設運営では職員不足がある、しかも、光熱水費や食費が上がって経営的には苦しいが、地域課題への対応があるのでオレンジカフェは施設でやっている。参加率はどれくらいか。
山抱委員	山手の方なので参加者はあまりいない。
松端委員長	認知症の人はどうか。
山抱委員	認知症のことを知られるというのを気にしている。
柳委員	いずみ障がい福祉サービス事業所団体連合会ではなく、自分の法人のことだが、自分の居る地域でも高齢化が進んでいる。富まち構想で、住宅の建て替えもあるようで、建物も人も高齢化しているところである。その中で法人は、以前より地域の人に認めてもらえるよう、障がい者の暮らしをサポートしてきた。昔から住んでいる人は、障がいを持っている利用者に優しく接して、お風呂に行っても自然とお手伝いをしてくれるようなお互いさまの関係性があるが、他の地域から来た人では十分理解をいただけないことがある。そのような状況でも、「ありがとう。」を言ってもらえるように、障がい者の力で地域貢献ができないかと考え、何かできないかということでずっと取り組んでいるのが、共同場所の掃除、ゴミ置き場の清掃、草むしりで、20 年ぐらい続けている。 「ちょいサポ信太」や光明台北校区のようなスタンスで、低価格でさせてもらい、「ありがとう。」の言葉をいただき、たくさん依頼をいただいて、自分の法人の事業所の知名度は上がり、感謝をしていただいている。これにより少しは関係性をつくることができ、和泉市内の多くの校区社会福祉協議会ボランティアさんから、Ｔシャツプリントやビブスづくりの依頼を受けている。幸エリアだけではなく、校区社会福祉協議会との繋がりで、和泉市の様ざまな人たちに事業所を知っていただくきっかけになり、活動もできている。様ざまな地域で幅を広げながら活動をしている。地域で困っている人がいれば、できることは何でもしている。今は喫茶店とラスク販売をしていて、一時期子ども食堂のようなことをしたことがあったが、あまり人

	気がなく、手間とニーズが合わなかったためすぐにやめた。障がい者たちの認知や理解ができて、役に立つポイントがあると思っている。障がい者も高齢化してきたところが最近の課題で、若返りを図りたい。和泉市には障がい者の事業所がたくさんあり、幸に居住している障がい者がいぶき野まで車で行く、逆に、観音寺に居住している障がい者が幸の事業所に来るなど、地域の人が知る機会がなくなっている。そういった実態もあるため、なかなか地域の担い手として地域に住んでいる障がい者にはつながらない状況であり、ニーズが合わず、ずれが出ていると感じる。
松端委員長	ニーズとやれることが合わないというのは、なかなか難しい。清掃活動は人気があるか。
柳委員	年々暑くなっているので高齢者はできない。去年までは手伝ってくれたが、今年は無理となってきている。
松端委員長	知名度がアップして感謝されて、地域との関係づくりのきっかけになる。それは結構いい面である。喫茶店はどうか。
柳委員	メインの喫茶店はそれなりに存続ができていますが、住民のニーズに応える、合わせることはうまくかみ合わなかった。
松端委員長	地域貢献をする気持ちはあるが、何がニーズで、どうしたらいいかが難しい。
堀田委員	黒鳥校区の協議の場ではお互い顔見知りを増やすということで、防災の取り組みで、自助の強化としてハザードマップを作ることになった。各家庭で、災害が起こった場合このルートで行けば早く避難所にいけるだろうということを共有しようとしている。社協、町会や各種団体の協力を得て行っている。もう１つ共助については、社協が行っているサロンを利用して顔見知りになり、人間関係が良くなる。災害が発生した場合は、お互いに協力する、頼みやすい関係を結んでいく。皆の集まるところに力を入れて、この事業を拡大しようという方向に向かっているので、今後もそういう体制に持っていきたい。
松端委員長	災害は待ったなしであるため、防災系の取り組みは大事である。ご自身が自助努力をやることと、共助の面があるということだったが、顔見知りは本当に重要だ。何かあったときに知っている人と知らない人とは全然違う。ハザードマップづくりであれば連携しやすい。避難ルートや福祉避難所もある。
堀田委員	課題だと思うことは、そのサロンに本当に来て欲しい人が閉じこもっていることだ。その人にどうやって参加してもらうかという課題がある。
松端委員長	本当に来て欲しい人は来てくれない。
岡田委員	校区社会福祉協議会ボランティアの代表として参加していますが、鶴山台南校区で検討しているのが防災意識の強いまちづくりである。去年の２月 22 日に、防災フェスティバルというタイトルで開催し、家具の転倒への対策は私が担当した。非常持ち出し袋の中身、３日間の食料備蓄、ポリ袋クッキングの実習も行った。参加者の１人は車中泊ができるよう車を改造して展示していた。訓練の一つに、スモーク（煙）体験があり、避難の方法を学んだり、消火活動体験を実施したりした。ボランティアをどう集めるかが課題であるため、ボランティアの事前登録をお願いするコーナーを作り、参加してもらった人に知ってもらいたい。自分なりの備えをする

	何らかのきっかけになればいいと思う。第５次和泉市地域福祉基本・活動計画に基づき、鶴山台南校区では、令和８年度は防災訓練を計画している。隣の人と顔見知りにということで、私の自治会では、毎年防災訓練や餅つき大会を開催し、若い人からお年寄りまで参加できるようしている。防災訓練の後は、炊き出しをして人に集まってもうらことも考えた。12 月には杵を使った餅つきをして、子どもからお年寄り、若者も来てもらい楽しんでもらった。やはりこれについても一番の課題が、出て来られない人をどうして来てもらうかである。鶴山台中地区の自治会としても、今後どう参加してもらうかを検討する必要性を感じる。
松端委員長	２校区とも防災がテーマとして含まれている。
芦田委員	地域貢献連絡会の件で、最近一般の企業でも地域貢献したいと考えているところがある。この地域貢献連絡会がどういうグループで集まっているかは知らないが、一般の企業をもっと誘い込んでいってもらいたい。
事務局（社協）	去年７月に開催の地域貢献連絡会は、社会福祉法人による連絡会である。
芦田委員	この連絡会は社会福祉法人ということで確認した。これから地域にある様ざまな企業に参加していただけるように声掛けをしてもらいたい。地域の中でどうすれば地域貢献できるかと待っている部分もある。
松端委員長	社会福祉法人にプラスアルファで地域貢献連絡会が活性化すると思う。地域住民も企業も地域で貢献すれば、それ自体がやはりメリットの対象である。
芦田委員	地域の企業も呼び込んでいくべきだと思う。
松端委員長	続いて、地域福祉推進協議会と福祉でまちづくり委員会の活性化についてということを事務局からの説明を求める。
事務局	<u>②地域福祉推進協議会と福祉でまちづくり委員会の活性化について事務局より説明を行った。</u>
松端委員長	２つの委員会があり、それぞれの委員会の役割や、活性化するためにはどうしたらいいのかというようなことでご意見を伺いたい。
村田副委員長	私自身も地域福祉推進協議会の方にも出席していて、地域福祉を具体的に進めていくためには、この福祉でまちづくり委員会と地域福祉推進協議会のそれぞれの役割を今一度しっかりと組み直して、特にこの福祉でまちづくり委員会は、実践の場で活躍されている皆さま、地域で活躍されている皆さまから意見を多く聴取する場でもあることから、より具体的にその地域の中での困りごとや、これから進めていきたいことを実践的に動けるように、何かが必要だと感じている。私自身も個人的に１期目の和泉市地域福祉計画から長く関わっているが、当初はそれぞれ役割が明確だったが、経年とともにそれぞれ何となく計画が作られてきた。計画に対して進捗状況があり、今後どうするか話し合いはできるが、より具体的にここをどうしていくか、そのような取り組みを実践していくことが難しくなってきた。私が関わっている滋賀県の草津市では社会福祉協議会が主導して、ここで言う福祉でまちづくり委員会の役割をしていると思う。福祉施設への送迎に関して、近所には知られたくないので家の前に車を直接停めて欲しくないという要望があった。しかし、車を停

	める場所がない。その時に、先ほど芦田委員が話していたように、地域の中のドラッグストアや薬局の駐車場で、広くて使い勝手がいい、フラットにもなっている。そういう所に協力をいただき、「きらっと草津」と名称をつけて、そこに協力いただける企業と地域住民の人にも協力いただいている。家族が認知症になったら使っていいという状況にも繋がり、お互いが緩やかにできる力を出しながら、このような話し合いをしようと思うと、今の地域福祉推進協議会の役割ではない。どちらかと言うと福祉でまちづくり委員会の役割であり、実働を担う部隊をつくっていくようなことが必要だと思う。
松端委員長	和泉市地域福祉推進協議会規則の第２条でも「福祉施策の円滑かつ計画的な推進及び地域福祉の充実に関すること」とあり、大きな話で計画づくりが中心だ。それから「地域福祉に関する方策の検討」で、地域福祉推進協議会の方は、全市的な地域福祉をどう進めていくかということだが、福祉でまちづくり委員会の方は、より具体的に実践されている方、重なっている方もいるが、より実践的な話ということになる。例えば先ほどの話は、以前読売新聞にも掲載されて注目されている活動となっている。そういう声を集めて、具体的な実践をしていくとなると、恐らく福祉でまちづくり委員会の方が議論しやすいと思う。
芦田委員	私たちも協議の場などで課題解決する会を開いている。結局こういう広い場面で話をしても、総花的な話で終わる。第５次和泉市地域福祉基本・活動計画ができたときに私たちが考えたのは、部会を開こうということだった。高齢者部会、子育て部会、障がい者部会、商店街部会など。地域の中にある課題を基に５つぐらいの部会を考えた。その中で自分たちが関われるところへ入るということで、具体的に動き出したのが子育て部会と高齢者部会だ。我々が協議の場で話をしても、気づけなかったことでも、関係者が集まるので内容が濃くなるし、課題もはっきりする。子育て部会では、夏休みに宿題を最初に終わらせる会をしようとなった。子どもたちが20人ぐらい来たら、カフェサロンで高齢者と一緒の居場所づくりをしようということで、子ども食堂を兼ねたようなことをやるなどの動きができた。高齢者部会では、道浦委員のお話にもあったおでかけ支援、生活支援をどうするかも話し合っている。聞いた話を持ち帰り、それぞれの中で問題を考えようということになる。この福祉でまちづくり委員会の中の、高齢者の生活支援のところは道浦委員に委員長になってもらってというような形で、障がい者だったら柳さんにまとめてもらうなど、分類を分けて、我々もそこに参加して進める、企業にも来てもらい主になってやってもらう。福祉でまちづくり委員会は、年に何回も開催せず年に３回か４回で進捗を報告するような形をすれば、会全体が活性化され、中身がよく見えてくると思い提案する。
松端委員長	福祉でまちづくり委員会に部会を置いて議論がしやすいようにし、ここで報告を受ける。以前はＣＳＷ部会で行っていた。
事務局	現在もＣＳＷについては市内の社会福祉法人８法人に対し委託しており、ＣＳＷ部会も現在も行っている。以前はこの福祉でまちづくり委員会で、ＣＳＷの活動報告を行っていたが、福祉でまちづくり委員会のあり方の見直しという過程で、ＣＳＷの活動報告がなくなったと聞いている。ＣＳＷの活動が地域福祉の推進と関係が深いこともあるので、今後は福祉でまちづくり委員会や地域福祉推進協議会の活性化という観点、連動させるということも必要かと思っている。委員皆様から意見を頂戴したい。
松端委員長	芦田委員の提案では、子ども部会や高齢者部会など部会を置いて、部会メンバーか

	ら報告をもらえば議論が活性化しやすいということだ。市民委員の田中委員はどう考えるか。
田中委員	私はＰＴＡと町会の役で地域の人と少し関わったが、町会の役はコロナが始まった頃で、ほとんど活動がなかった。それでもそれがきっかけで、様ざまな地域の話を教えてもらっていた。現在北信太駅の周辺は少し元気になってきた高齢者が増えてきたように思う。少し役割を振り分けたりすることで、高齢者も交流が増えてきているのではと思う。
松端委員長	役割や出番など、何かないと本当にすることはなくなる。
田中委員	何をしたらいいかが具体的に分からないような感じだ。今までできていたことが、体が不自由になってできなくなったことで意欲が無くなり、精神面のダメージも大きくなり、活動ができなくなる高齢者を見ていると、自分ができるようなこと、お花の水やりなどちょっとしたことをやっていくことで意欲が出てくると思う。
松端委員長	心身の健康のためには人が集ってお話することが必要で、具体的な活動が必要となる。コロナ禍ではそれがなくなったので、今は再開してきているように思う。
田中委員	今は役を引き受けていないのですが、それをきっかけにその地域の人との挨拶程度とか、ちょっとした会話をすることができる。
松端委員長	健康寿命の延伸、認知症予防など、生き生きと動ける機会が多いほうがいい。 部会を作るとなれば事務局でまとめてもらう方がいいか。
事務局	部会については、各委員のご意見等をいただきたい。部会についても、先ほどの芦田委員からの提案のように、いわゆる対象者別として、高齢者部会、障がい者部会、子ども部会のように対象者別の部会を設置するのか、先ほどから挙がっている参加者の拡大や協力者の拡大などの分野横断的なテーマに対して設置するのかと考えている。実際に何をゴールに、どういう部会を設置して、部会で何を議論するのかという管理は、事務局である福祉総務課が何らかの事務局機能を担うことになると思う。今後の部会の形式、持ち方、設置の仕方、どういうプロセスを経て設置をするかなど、活性化に向けて議論していくことになると考えている。
芦田委員	アイ・あいロビーは学生の福祉体験に取り組んでいるが、内容のことが案外知られていない。関係団体で何度か打ち合わせをしてプレゼン資料を作り、学校の先生にも来てもらい、自分たちの教育の中に取り入れていくという話が最後には出てきた。私が言いたかったのは、やり方を少し考えたりすることで、知らなかったこと、どうしたら来てくれるかということに対して問題点を出してもらい、話を持ち帰ってもらう、このようなことを詰めて話をすることで話が進む。
松端委員長	福祉でまちづくり委員会のあり方を、事務局で何かまとめてもらえるか。
事務局	11 月に開催した地域福祉推進協議会で、この活性化について意見を聴取した。地域福祉推進協議会でも同様に部会の設置、施策部会も含めた部会の設置が必要だという意見や、インフォーマルサービスの検討、和泉市福祉でまちづくり委員会規則に基づいた具体的な検討実践が必要であるという意見があった。この福祉でまちづくり委員会でも、継続的に議論していくことが必要であるといった意見が出た。今後の活性化に向けた動きは、聴取した意見をもとに組織図のあり方の案を作成してい

	く。地域福祉推進協議会や本委員会で様ざまな委員の皆様にご参画いただいているもので、その委員の皆様が所属している各機関団体としてどういう役割を担うか、期待されるものなども明文化し、意見をいただきたい。開催頻度は、これまで地域福祉推進協議会2回、福祉でまちづくり委員会も年2回となっていたが、例えば地域福祉推進協議会は年に1回、まちづくり委員会は年3回というような、開催頻度、開催の設け方についても意見をいただき、意見を基に事務局として案を作成し、次年度開催予定の地域福祉推進協議会で事務局案を提示し、ご審議いただき承認をいただければ、その結果を次回の福祉でまちづくり委員会で報告する。部会設置のプロセスなどについてご議論いただきたい。
松端委員長	次の地域福祉推進協議会は令和8年度か。
事務局	地域福祉推進協議会は、本委員会と同様に会長でございます松端委員長と相談させていただく。
松端委員長	来年度の早々にでも地域福祉推進委員会を開く。
事務局	そのように考えていきます。
松端委員長	そこで体制表のようなものを作っていただいて、議論を行い承認されればそれを踏まえて本委員会を開くことでよいか。
事務局	はい、そのように考えている。
松端委員長	こういうことでよろしいか。
事務局	先ほどいただいた課題については、地域福祉推進協議会で案を提示し、承認を経て、次回の福祉でまちづくり委員会で事務局より説明をする。以上をもって、令和7年度第1回和泉市福祉でまちづくり委員会を閉会とする。